

## 新シリーズ、水田農業イノベーション、開始

先月号の特集タイトルの通り、故・勝部徳太郎氏が言う「1反歩で喰えない奴は何百町歩やつても喰えないのだ」という言葉は誠に農業経営の真実を言い得ている。

終戦直後、2・4 haの耕作規模だった徳太郎氏は、畑にイチゴを作り、大いに稼いだ。しかし数年後、戦地からの復員者が増えてくると、皆がやるからと、もうかっているイチゴをやめてしまった。食料増産の時代にダリアの花と球根を作った。

「人々が飢えのおびえから解放されたら、それまでイモを植えていた庭に花を植えるようになる」という時代に対する洞察からだ。

現在170 haを超える勝部農場も最初は決して規模の大きな農家ではなかった。時代の人と社会を見つめればこそ、イチゴやダリアに取り組んで成功した。

さらに、13 ha程度だった昭和30年代半ばに日本に輸入が始まったばかりの30馬力級トラクタを家一軒分の投資をして導入。その翌年にはさらに50馬力級のトラクタと畑作作業機を導入して、賃耕でその後の規模拡大の原資を得る。

筆者が出会った今から約30年ほど前でも、すでに100 haをゆうに超える規模で麦の単作経営に取り組んでいた徳太郎氏と現当主の征矢氏。

その当時、なぜ輪作をしないのかと聞いたら、「連作障害という言葉があるが、経営には輪作障害というものがある。輪作するには、その作物分の機械投資が必要になるが、単作ならそれは要らない。そんな金があるのなら、湿潤な日本の気候でも麦を連作できる畑を作ることに金をつぎ込むのだよ」と征矢氏は笑って答えた。でも、誤解すべきではない。勝部農場の圃場改良はすべて自前の投資。しかも、そのレベルは基盤整備事業で行なわれる水準をはるかに超えたものだ。征矢氏は、「自己負担がいくら小さいからといって、そんなものを待っていたら損すると思われるかもしれないのが経営者としておかしいよ」と話す。

イノベーション（創造的破壊）を実現する経営者の思考とはこういうものではないか。全国のたぐさんの読者が勝部農場に学び、勝部農場とは別の形でさまざまなイノベーションに取り組んでいる。

経営者の数だけ経営の形は有り得

るわけで、規模拡大だけがイノベーションではないことは、終戦直後の勝部農場が取り組んだことを見れば分かるはずだ。

イノベーションとは、時代と社会やマーケットの変化を予見し、常識にとらわれずに未来から逆算した今日を創ろうとする経営者によって実現されるのだ。水田農業は、我が国の農業のなかでもとりわけ政策依存度の強い形で続いてきた。そして、我が国はTPPへの参画を決めた。このままの状態が続けば間違いなく水田農業は安楽死してしまう。であればこそ、今が水田農業のイノベーションを起こすチャンスなのだ。

政策依存ではなくマーケットを見つめれば、水田経営には改革と成長の余地がたくさんある。機械化、経営戦略としてのコメ品種や作物の選択、取引のあり方、経営利益の考え方などなど。現実の経営手段の選択から、トウモロコシを含めた飼料穀物を水田経営に取り込んでいくことまで、テーマは多岐にわたる。

一方では、今月号の林芳正農水大臣のインタビューにあるような政策的働きかけもしながら、農業経営者や関連業界の皆様と共に、「経営実驗」に取り組みつつ、「水田農業イノベーション」をテーマとした新シリーズを始めたい。

# 江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。全く管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。